

長田夏樹氏の契丹文字に係る論文をよむ—その1

吉池孝一

1. はじめに

10世紀から12世紀にかけて東アジアの北側の地域で国定の文字が次々に作られた。遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字、それから元のパスパ文字である。これらの文字は、国が滅ぶと共にいつしかその使用も途絶え、解読が必要な文字として今に至った。西夏文字と女真文字はほぼ解明され、最初に作られた契丹文字だけがアジアの未解読文字、正確には解読半ばの文字として残った。パスパ文字については、そもそも解読という作業が必要であったか否か難しいところであるが、解読に準ずる文字として扱いたい。そうすると、これらの文字は解読という言葉で共有する東アジアの文字ということになる。

さて、文字の解読ということにつき、かつてポーブという研究者が『古代文字解読の物語』という本の前文でこんなことを言った。「解読とは門を開くことであり、解釈とはその向こうにある広がりに関わることなのである」と<sup>1</sup>。解読と解釈(あるいは判読)の境目を截然と区別することは難しいが、この「門を開く」という表現はなかなか言い得て妙である。未知の文字資料を理解するために、門を開く鍵すなわち「手続き」を発見しながら読み解いていく、これが解読なのであろう。解読の醍醐味とはじつに「手続きの発見」にあるといってもよい。このような手続きはふつう複数に及び、その中のどの手続きがもっとも重要であったかという評価によって主要な解読者乃至グループの名が解読史に刻まれることとなる。もっとも、主要な解読者の出現に至るまでにはさまざまな準備段階があることはポーブ1982をみるとよくわかる。また、当時の世間の評判とは別に、後に有効な手続きの発見者として評価されるようになった場合もある<sup>2</sup>。また、重要な発見の影に、発見者自身も意識していないような事実が隠れている場合もある<sup>3</sup>。さらには、画期的な解読の段階というものを定めがたく徐々に解読が進んでいったと言わざるを得ないような場合もあるようだ<sup>4</sup>。

そこで、東アジアの解読を必要とした諸文字につき過去の研究を読み直し、解読の歴史のなかで、どのような位置を占めるかを確認してみたいとおもう。今回は長田夏樹氏の契丹文字・契丹語研究に係る論文「契丹文字解読の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて—」(1951年12月)を読む。

2. 清格爾泰・劉鳳翥等1985の成果

契丹文字研究を解読史の中に位置づけるばあい、中国の契丹文字研究小組1977で提示され清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝林・邢復礼1985(以下、清格爾泰・劉鳳翥等1985とする)として結実し、広く世に問われることとなった成果につき前もって確認しておくべきで

<sup>1</sup> モーリス・W・M・ポーブ著/唐須教光訳1982の「前文」7-8頁参照。

<sup>2</sup> ペルシア楔形文字の解読におけるグローテフェントの役割。当初グローテフェントに光が当たらなかったのは論文の記述の仕方にも原因があったようである。モーリス1982の136-150頁参照。

<sup>3</sup> 甲骨文字における董作賓氏の「貞人」の発見と『鉄雲蔵龜』の「卜人」の関係。吉池孝一2008参照。

<sup>4</sup> ヒッタイト象形文字解読の経緯。モーリス1982の186-199頁参照。

あろう。このグループは、契丹小字の碑文から文字要素たる 378 の「原字」（異体字を含む）を抽出し、そのうちの 98 字につき借用漢語音との対応によって音価を定めた。次いで、対訳漢語碑文などによって語義を推定した契丹文字表記契丹語につき、先に定めた 98 の原字の音価、史書所載の漢字表記契丹語、関係諸言語の音形の三者を利用して 17 字の音価を新たに定めた。最後に、各種の語尾につき母音調和を想定して音価を定め 16 字を提示した。このようにして暫定的なものも含めて合計 131 字(or132)<sup>5</sup>の原字の音価を定めることができたわけであるが、これは契丹小字で表記された借用漢語音に拠って小字の音価を推定するという「手続き」を組織的に利用したことによるものであった。

### 3. 長田 1951 と長田 2001 について

今回読むこととした「契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」（『神戸外大論叢』1951 年 12 月）は、その誤植を訂正し、表現を改め、さらには内容の増補や削除もおこなって「第 8 章 契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」として『長田夏樹論述集(下)』2001 年 1 月）に収められた。前者を旧版、後者を新版と呼ぶことにする。新版は独自の価値を有するが、旧版と新版の間に主旨の変更はなく、新版から読み取ることのできる価値は旧版がすでに有するものである。いっぽう新版で削除された部分は旧版によるしかない。したがって、新版を中心に旧版を合わせ見るということになるのであるが、そのさい、僅かであるが旧版にない新たな不都合が生じた部分などがあるので注で確認をしておく<sup>6</sup>。新旧の最大の相違は新版での「契丹元字總表」の削除である。

新版(146 頁 20 行目)に「哀冊について言えば元字の総数は 327 字あるが、そのうち何個の表意元字が含まれているか不明であるにしても、」とあるが、総数 327 字に相当する表は

<sup>5</sup> 清格爾泰・劉鳳翥等 1985 の総表(152-153 頁)には 132 字あるが、解説部分で音価の推定がなされているものは 131 字。総表には原字番号 14 が余分に付されていることになる。この原字につき 117-118 頁で触れる部分はあるが音価の推定はなされない。やや込入った話であるが、これは漢語官名「都統」と契丹語官名「楚古」に係る問題であり未整理な義論が混入したための齟齬である。この点についてはここでは立ち入らない。

#### 6 〈新版での新たな誤植〉

- ・新版(135 頁 7 行目。行数は文字部分のみを数える、以下同様)に「・・・、かつトゥングース語派の p, f, h, o に対応 — トルコ語派では o — しているので o < h < φ < p とその変化を跡づけることができるから、契丹の p が中世蒙古語の h と対応するとすれば、アルタイ基語の p と直接結びれることとなる。」とあるところの三箇所のラテン文字 o は文意よりゼロ子音を示すこと明らかであり旧版では数字 0 を用いていることから、ここでも誤解を防ぐため旧版のとおり 0 とすべきであろう。
  - ・新版(135 頁最終行)に「dax. t'au」<sup>5</sup>とあるが、旧版のとおり「dax. t'au」<sup>5</sup>とすべきであろう。
  - ・新版(141 頁 12 行目)に「gui 《玉の》」とあるが、旧版のとおり満州語属格語尾 i を分かち書きして、「gu i 《玉の》」とすべきであろう。
  - ・新版(147 頁下から 4 行目)に「本章第 4 節」とあるが「本章第 3 節」である。
  - ・新版(152 頁 8 行目左端)に「14」とあるが、旧版のとおり「84」である。なお、同頁 4 行目につき旧版は「詞頭 20、詞中一、詞尾 1、単独一」とし新版は「詞頭 20、詞中 1、詞尾一、単独一」とする。ここは新版が正しい。道宗宣懿皇后哀冊本文第 23 行第 2 語中に詞中の用例がある。
- 〈両版に共通した誤〉
- ・新版(136 頁 6 行目)、旧版(49 頁 20 行目)ともに「・・・奢、捨「好」→「・・・奢、捨「好」(5b)」
  - ・新版(137 頁 17 行目)、旧版(50 頁 24 行目)ともに「・・・抄離(9a)→「・・・抄離「戦」(9a)」
  - ・新版(139 頁 4 行目)、旧版(51 頁 28 行目)ともに「・・・倍其不離「驚鬼」→「・・・倍其不離「驚鬼」(17)」
  - ・新版(143 頁 5 行目)、旧版(56 頁 1 行目)ともに「・・・「始太祖制丹大字、」→「・・・「始太祖制契丹大字、」
  - ・新版(145 頁 21 行目)、旧版(58 頁 14 行目)ともに「q<sup>a</sup>r<sup>a</sup>n<sup>y</sup>」→「q<sup>a</sup>γ<sup>a</sup>n<sup>y</sup>」
- なお、新版における単純な誤植については言及しない。

ない。この個所につき旧版(65頁20行目)をみると「総表(p62, 63, 64の表)に明らかな如く元字は327字あるが、その中何個の表意元字が含まれてゐるか不明であるにしても、」とし「契丹元字總表」を掲載する。旧版より新版への表現の変更部分(下線部。下線は吉池による)によるかぎり、意をもって「契丹元字總表」を削除したもののようである。

#### 4. 村山 1951(3月)と田村 1951(8月)

さて、長田 1951(12月)の副題にみえる村山 1951(3月)は、契丹文字研究小組のいう「原字」を契丹小字と考え、原字を綴り合わせた単位を契丹大字と考えた。そして、契丹小字すなわち契丹アルファベットの出所を突厥文字に求め、その突厥文字の音価によって直接に幾つかの「原字」の音価を定めた。そしてその音価を十数個の所謂「契丹語」に当てはめて解釈し、これで契丹文字の解読は可能であるとした。この突厥文字依拠説については、契丹文字研究小組 1977 および清格爾泰・劉鳳羲等 1985 で推定された音価との比較を通してほぼ完全に否定することはできるのであるが<sup>7</sup>、論文が発表された当時の反響は大きかったようである。

まず田村 1951(8月)がでた。これは当時の契丹文字・契丹語についての共通認識を提示しつつ村山 1951(3月)を評価したもので当時の状況を知る上でも有用である。やや長いが関係部分を引用する。「・・・などの諸論文が相ついで発表されていることから明らかであろう。筆者もこれらの人々の驥尾に附しつつあったが、われわれの帰納しえたところは、契丹語はおそらくモンゴル語—これは陵墓内の像画からも推測されえたが一であろうこと。契丹の一語は若干個の原字(アルファベット)より合成されていることが篆蓋の隸書体文字と哀冊本文の楷書体文字との照合から確認されること。したがって契丹文字は大部分が綴音文字であること。その原字は少くとも約220~230個はあること。原字は音字のほかに意字も多少あること。原字の合成法は2個の時は上より下へ、3個の時は左より右へ、ついで下へ、4個の時は左から右へ、ついで左下より右下へ、5個の時は4個の下に1個を加えるという順序である。所有格を示す文字が抽出しえられること。などであった。他の人々の考えも大同小異であったであろう。ただそれらの中にあつて、前記遼陵石刻集録中にのせた羅福成氏推定の契・漢の逐語的置きかえ・・・略・・・が、ただ一つの手がかりを提供するものであった。しかしこれとても、暗中模索にすぎないもので科学的立場から契丹文字を解読したものではなかった。ところが本年3月(1951年)村山七郎氏は、日本言語学会の機関誌、言語研究(第17,18合併号)に「契丹文字解読の方法」という一文を発表することによって、遂にこの難問を解決することに一光明を見出した。・・・契丹原字を突厥文字と比較対照して、遂に解読へのキイを発見したのである。」(48頁)。

田村 1951(8月)の記述を見ると、哀冊文に対する当時の共通認識が正鵠を得たものであることがわかる。いずれにしても、村山 1951(3月)の突厥文字依拠説を、口を極めて賞賛するわけであるが、長田 1951(12月)は違っていた。長田 1951(12月)は、先ず史書所載の漢字表記契丹語38例につき、白鳥 1910-1913 および村山 1951(3月)を参照しつつ再検討し、契丹語はダフル語、モンゴル語、特に後者に近似するとした。次いで村山 1951(3月)

<sup>7</sup> 推定音価の是非は、その手法によってではなく、最終的には他の推定音価との比較によって決定せざるを得ないであろう。

の新説を批判し、自らの方法を提示した。

## 5. 村山 1951 (3 月) への批判

長田 1951 (12 月) の村山 1951 (3 月) への批判のうち主要なものは次の三点となる。

その一。史書所載の漢字表記契丹語を検討すると、語頭に P を有する点、母音の音価等の点において、蒙古文語とは明確に異なる特徴を示している。しかしながら、村山 1951 によって解説されたとする「契丹語」はあまりにも蒙古文語的である(趣意。新版 142 頁、旧版 54 頁)。

その二。「約 40 字の突厥文字と、後述の如く 200 字に余る表音元字、すなわち契丹アルファベットとの比較は当然音価の同じ文字が何らの条件も伴わずに異なった幾つかの形で現われ、また幾つかの装飾が付されているという非合理的な結論に到着する結果となり全面的には賛成し難い。」(新版 145 頁、旧版 57 頁)。

その三。「原字」(長田 1951 は元字とする)の組み合わせかたは、左から右、上から下と考えるべきであるが、村山 1951 で解説された「契丹語」では右から左となるものがある。とくに道宗の篆蓋と哀冊本文との対応関係からみて左から右としか読み得ない 3 語につき右から左に読むのは説明がつかない(趣意。新版 146 頁、旧版 58 頁)。

以上村山 1951 に対する批判のうち、原字の配列順については、反論のしようのないものであった。村山 1951 は 7 語につき右から左に読むわけであるが、そのうちの 3 語は篆蓋と哀冊本文との対応関係からみて左から右としか読み得ないもので、そのことは村山 1951 も認識していたはずであり自己矛盾としか言いようがない。この原字の配列順につき、先に引用した田村 1951 を見ると、田村氏も左から右に読むとして正しく認識していたことがわかる。それにもかかわらず、突厥文字依拠説に賛同したわけであるから、この説には理屈を超えて人を魅了するものがあつたのであろう。

## 6. 長田 1951 の方法

長田 1951 は独自の方法や観点も提出した。主要なものは次の三点となる。

その一。契丹語はダフル語、モンゴル語、特に後者に近似していることを示唆する。もっとも「しかしそれは他に多少の根拠はあるが直観的にそう感ぜられるだけであつて科学的な証明は契丹文字が完全に解説された後を持たなければならない。」と慎重な態度であつた。現在にあつても契丹文字は解説半ばであり契丹語の帰属の問題は依然として課題の一つであるが、孫伯君・聶鴻音 2008 によると中国の契丹語学者の間では契丹語をダフル語(達斡爾語)の古形と見なす向きにあるようだ<sup>8</sup>。

その二。哀冊より 327 個の「元字」を抽出し「契丹元字總表」として提示した。管見による限りこれは契丹文字研究史において初めての試みである。この「契丹元字總表」は字形の類似によって 327 個の元字(清格爾泰・劉鳳翥等 1985 は原字とする)を配列したものであり、清格爾泰・劉鳳翥等 1985 の 378 個の原字表も同様の原則により配列する。全体の配

<sup>8</sup> 「近年来随着契丹大、小字解読的深入，人們對契丹語語音情況的了解進一步加深，国内的契丹語文学者也越來越傾向認為契丹語属于阿爾泰語系蒙古語族，是達斡爾語的祖語。」(21 頁)。なお、契丹語をダフル語(達斡爾語)の古形とする考えは白鳥 1910-1913 にみえる。

列順序は長田 1951 とは異なった印象をあたえるが、細部をみると、長田 1951 の「契丹元字總表」を下敷きとして、それに改定増補を加えて作成したことを見て取ることができる。もっとも、長田氏の新版(2001)にこの表はない。先に、本文の改定の仕方からみて意を持って削除したようだということを述べた。おそらくは、契丹文字研究小組 1977 および清格爾泰・劉鳳翥等 1985 で 378 字に及ぶ原字表が提示され、この 378 字の原字表は長田 1984 に引用されていることもあって、新版(2001)では削除したのであろう。解説史においては重要な意味を持つ表であり遺憾である。

その三。楷・行・草の書体を異にする「元字」を同定し、道宗宣懿皇后哀冊を資料として、詞頭・詞中・詞尾・単独で現われる出現頻度を調査した。これにより語頭のみ表れる元字番号の 224(37 回)と 108(25 回)と 100(16 回)は母音もしくは P を語頭にもつ音節であり、前二者は母音の a あるいは ä ではなからうかと推定した。108(25 回)は字形の認定に難しい点があるため除外するとして、清格爾泰・劉鳳翥等 1985 は 224(37 回)を [ʃ]、100(16 回)を [p' / f] とするから、後者については長田 1951 の推定は正しかったということになる。語の位置における出現頻度のみにより元字の音価を確実に推定することはできないが、このような調査は音価推定の前提となる基礎研究である。

## 7. おわりに

長田 1951 は契丹小字解読の確かな出発点を定めた。すなわち、原字(長田氏は「元字」とする)の表を初めて提示し、組み合わせ文字(長田氏は「詞字」とする)となった場合の原字の配列順を確認し、さらには「詞字」中の位置による原字(楷書と行書と草書の同定を経たもの)の出現頻度に着目し統計をとった。この三つは、契丹小字に限らず、未解読の表音文字を解読するうえでの基礎的な研究である。当時使用できた資料は限られていたため原字表は十全なものではなかったとはいえ、解読を確かな軌道に乗せたという意味で、長田 1951 は一つの解読の山を越えたのである。これで準備は整い、あとは原字の音価を定める仕事が残った。二つ目の山である原字の音価の推定は、契丹文字研究小組 1977 でなされ、清格爾泰・劉鳳翥等 1985 に結実した。

ところで、契丹文字研究小組は、契丹小字で表記された借用漢語の漢語音に着目し、その漢語音から小字の音価を推定するという「手続き」を組織的に利用することによって解読を大きく進めたわけであるが、この「手続き」自体が何時発見されたかという問題は、別に存在する。この点については、長田 1984 で明らかにされていることであり、次稿で触れる。

〈参考文献(発行年順)〉

- 白鳥庫吉 1910-1913. 「東胡民族考」, 『史学雑誌』 21-24 編。『白鳥庫吉全集 第四卷 塞外民族史研究 上』 (東京: 岩波書店 1970 年, 63-320 頁) 所収による。
- 村山七郎 1951. 「契丹文字解読の方法」『言語研究』 第 17・18 号(昭和 26 年 3 月), 47-70 頁。
- 田村実造 1951. 「契丹文字の発見から解読まで —村山七郎「契丹文字解読の方法」を読む—」, 『民族学研究』 第 16 卷第 1 号(1951. 8), 46-48 頁。
- 長田夏樹 1951. 「契丹文字解読の可能性 —村山七郎氏の論文を読み—」, 『神戸外大論叢』 第 2 卷第 4

号(昭和 26 年 12 月), 40-66 頁。

契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『内蒙古大学学报』 1977 年第 4 期契丹小字研究專号。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝林・邢復礼 1978. 「契丹小字解讀新探」, 『考古学報』 1978 年第 3 期。

モーリス・W・M・ポーブ著/唐須教光訳 1982. 『古代文字解讀の物語』, 東京: 新潮社。

長田夏樹 1984. 「契丹語解讀方法論序説」, 『内陸アジア言語の研究 I』 神戸市外国語大学, 1-49 頁。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝林・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』 北京: 中国社会科学出版社。

長田夏樹 2001. 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文積・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』 京都市: ナカニシヤ出版。

吉池孝一 2008. 「鉄雲蔵龜の五問とト人」, 『KOTONOHA』 64 号, 10-14 頁。

孫伯君・聶鴻音 2008. 『契丹語研究』 北京: 中国社会科学出版社。